

第2章

対面と歓待



## ●難病の子の夢をかなえる

1995年の夏から秋にかけて、出口が見つからない廊下を歩いているように両親には思えた。真由子さんの障害は徐々に進んでいく。思いどおりの言葉が、なかなか発せられないのだ。

「真由子は楽しい思いもできず、このまま……」

そう思うと、ますます暗闇の中に突き落とされるような気分になり落ち込む。そんな両親に一筋の光がさしたのが、メイク・ア・ウィッシュ・オブ・ジャパン(MAWJ)の存在だった。

胆石の手術を終えて、久しぶりに帰宅した和子さんが、たまっていた郵便物を整理していて、「東京の会通信」9月号に釘づけになった。「公的骨髄バンクを支援する東京の会」が毎月発行している会報で、全国のボランティア団体にも発送しているから、一家にも届けられていたのだ。

「患児の夢をかなえてあげましょう……メイク・ア・ウィッシュが「夢」の登録募集中！」

そんな見出しのあとに、MAWJの概略が説明してあった。

「3歳から18歳の難病の子どもの夢をかなえ、プレゼントしてきたボランティア団体があります」

具体的に実現した夢の内容も載せてある。

〈遊園地にいきたい〉

〈マイケル・ジャクソンに会いたい〉

〈チャゲ&飛鳥のコンサートに行きたい〉

〈野生のイルカと泳ぎたい〉

〈アメリカのディズニールランドに行きたい〉

〈ウルトラマングレートと一緒に闘いたい〉

これだ！ と直感した和子さんは、政人さんの職場に電話をかけた。

「真由子の夢をかなえようよ。ドナーも見つからないし、移植ができそうもないあの子の楽しみを増やしてあげようよ」

政人さんにも反対する理由はない。MAWJ(八木昌実理事長)にすぐ電話した。95年9月20日のことだ。真由子さんの夢はほぼ予測できた。X JAPANにちがいない。だから、電話では早くもその願いを伝えておいた。

30日には東京のMAWJ事務局から、スタッフの大野寿子さんら4人が和歌山を訪れた。本人から直接「夢」を聞きたいのと、主治医に会ってウィッシュ・チャイルド(夢を実現してもらう子ども)の夢実現への医学的見地からのアドバイスを受けるためだ。

「真由子さんは、どんな夢をかなえたいの？」

和子さんから聞かされてはいたが、本人に確認したい。

「X JAPANのみんなと、ディズニールランドへ行きたい！」

グループ全員というのは無理かもしれない。2番目の希望も聞いておきたい。

「じゃあhide、hideに会いたい！」

夢の希望が有名人との対面である場合、実現するとは限らない。本人に接触できるどころか所属事務所の方針で協力してもらえないケースもあるのだ。そのために、第1号のウィッシュ・チャイルドからそうなのだが、3番目の希望まで聞くことにしている。

「やっぱりhide」

別の選択肢があれば、hideとの対面が無理でも、そちらに望みを託すことができるが、真由子さんは初志を貫いた。困った大野さんは、「じゃ4番目は？」……と、なんと9番目まで尋ねた。真由子さんも譲らない。答えはすべて同じだった。

「hideに会いたい！」

この時期になると、真由子さんの部屋はX JAPANやhideのポスターや写真が壁ばかりか天井にも貼り付けられ、写真入りの額が机の一角を占領するようになっていた。

(こうなったら、hideさんとの対面を交渉するしかないわね)

大野さんは、実現性を危ぶみながら、そう思うしかなかった。三男がX JAPANのファンである大野さんは、その特異な存在も人気のほども知っていたため、なおさら難しいと感じたのである。

ウィッシュ・チャイルドになるためには条件がある。アメリカの本部が出している世界共通の病名リストを参考に、メイク・ア・ウィッシュの理念に沿って決められるのだ。

田中医師からアドバイスを受けた大野さんらは、その日のうちに帰京して、真由子さんの夢の実現に向けて動き出した。

だが、戸惑った。hideの所属事務所がどこかわからない。手づるを伝って探し当てて電話をかけ、いささか強引に資料送付の約束をとりつけた。

A4判の用紙に1100字を費やして、真由子さんの夢の実現に思いを込めた。併せて、両親にも手紙を書いてもらい、それも一緒に送った。両親の手紙は、こんな具合だ。

「私達の娘、真由子は14才。難病と闘いながら、毎日がんばって学校に行っています。真由子の今の楽しみといえば、X JAPANのビデオを見たり、CDを聞いたりする事です。X JAPANの載っている雑誌を色々集めて、切り抜いています。部屋のカベには、ポスターがぎっしりです。真由子の夢は、X JAPAN特にHIDEさんにお会いする事です。真由子の病気は、現代の医学では、どうにもならないと云われています。しかし、進行性ですので、少しずつ悪くなっています。何とか、助かる可能性を求めて、危険を承知で、骨髄移植をしようと決めました。大変危険で成功率が30%といわれています。12月31日に行くドームのライブがおそらく最後になるかも知れません。本人は、2月の大阪城ホールのライブを見てから移植を希望していますが、1日でも早い方が、病気の進行を止める為に有効ですので、12月31日を過ぎれば、なるべく早くと思っております。10月中旬には大体の日程が決まると思います。本人には成功率の事は知らせません。でも、1つでも夢をかなえてやりたいと願っております。御迷惑と思いますが、真由子のがんばる心

の支えとなる様に夢の1つでも実現出来ます様、御力を貸していただけませんでしょうか。どうか、よろしくお願いいたします。

貴志政人 和子

大野さんは、資料だけでもとにかく見てほしいと思います、急いで事務所を訪ねたら、そこは別のメンバーの事務所だった。すぐ近くにあるhideの事務所を改めて教えられ、マネジャーが会ってくれるかどうか不安を抱えつつも、とにかく事務所へ飛び込んだ。すると、マネジャーの対応はいつもあっさりしていた。

「hideはいま、ロサンゼルスにいますから、これから連絡をとりますが、たぶん大丈夫でしょう」

まさか？ そんなに簡単に了承が得られる相手とは思っていなかった大野さんは、実感がわかないまま半信半疑の思いだった。2週間後、マネジャーの予測どおりになったという連絡を受けて、大野さんは本心から感じた。

「hideって、優しいんだなあ。それに、事務所もあつたかくて、とつてもいい人がそろつてるみたい」

過去に、ウィッシュ・チャイルドが対面を希望する有名人について、所属事務所の冷たい対応を経験している身としては、本心からうれしい。実際のところ、五分五分か四分六でダメではないかと考えていた大野さんは、久しぶりに肩の荷が下りる心持ちとなった。

そうになると、具体的な対面の段取りを決めなければならない。が、大野さんにはふとひらめくも

のがあつた。

「この対面を、全国規模のマスコミが取り上げてくれないかしら……」

それまで、8人のウィッシュ・チャイルドの願いを実現してきたが、3人が地元のテレビ、新聞で紹介してもらえたものの、それ以上に広がることはなかった。

大野さんの願いは、「ひとりでも多くの難病と闘う子どもたちに、こんなボランティアグループがあることを知らせたい」という一点にある。しかし、MAWJの知名度はほとんどない。せめて、その存在をより多くの患者の親に知ってもらえれば、活動にも広がりができると考えた。

メイク・ア・ウィッシュのボランティア活動は、もともとアメリカで始まった。1980年に、警察官を夢見ていた8歳の男の子が白血病となり、伝え聞いた地元アリゾナ警察が本物そっくりの制服、バッジを用意して名誉警察官に任命し、駐車違反の取り締まりなどを体験させたのがスタートだ。

この子は5日後に亡くなったが、彼の夢を実現するために奔走した人々が、「ほかに夢を持ちながら果たせない子が大量にいるにちがいない。夢をかなえさせよう」とメイク・ア・ウィッシュ基金を立ち上げたのである。

日本では1992年12月、在日アメリカ人女性によって沖縄で旗揚げした。いわば「日本支部」で、アメリカの本部の規約に従って活動しているが、財政的には独立しているため、それなりの苦しさがある。93年3月には最初のウィッシュ・チャイルドの夢をかなえ、その後、事務局を東京に

移したが、活動を知る人はほとんどいなかった。

マスコミへの公開について、貴志さん一家の了承は得た。hideサイドには、対面は実現できることになったけれど、さすがにこれは少し難しいかなと危ぶんでいた大野さんは、これも難なくクリアできてホッとしたのだ。

すでに、対面は大晦日のコンサート会場だと決まっていたから、経過説明を含めたマスコミ用の案内を一斉に郵送した。

テレビ、雑誌、新聞社が何社か企画書を送ってきた。その中で、全国放送網を持っているTBSの関連会社から1時間番組を制作するという案が示され、テレビ朝日系列のワイドショー「スーパーモーニング」ともども映像関係は2局に任せることになった。

一方、真由子さんは所属事務所を通じて、hideに手書きの手紙を初めて出した。

Dear hide

こんにちは。私はX JAPANの大ファンです。私は今、病気で治療しています。心の支えはXです。いつもXのことを思っています。Xの曲を聞いて勇気づけられて、はげまされています。私の夢はXに会うことです。いつも「Xに会いたいな」と思っています。私は背が低いのでライブに行っても、アリーナで見たいけれど、見れないので、今年の東京ドームのチケットもスタンド席を買っています。だけどスタンド席だと小さくしか見れないので残念です。もしXに会えて、話ができたら、これからの治療もがんばれると、思います。わがままを言えば、Xのみんなとい

つしよにドイツニerlandに行きたいです。

From Mayuko Kishi

hideとの対面が実現することになったのと時期を合わせるように、真由子さんの移植が決まろうとしていた。hideの事務所に両親が送った手紙にあるように、一家はほぼ決めていた。

最終的には、東海大学病院小児科の加藤俊一助教授を訪ねて決断することにした。ドナーは依然あられていなかったため、CD34陽性細胞移植となるからだ。12月25日、真由子さんは両親、仁美さんと一緒に伊勢原の東海大学病院を訪れた。

加藤助教授の事前説明は、詳細をきわめることで定評がある。いわゆるインフォームド・コンセント(十分な説明と同意)の場となるわけだが、説明にはほぼ2時間をかける。このときもそうだった。

特に、真由子さんに実施されるCD34陽性細胞移植は、その後ほかの病院でも手がけられるようになり、98年時点では全国で100例を超しているが、真由子さんの前には10例しかおこなわれていなかった。

「それに、移植を終えても安心はできません。感染症やGVH病など、次々と襲ってくる危険要因があります。むろん私たちは、それに対応していきますが、予測もつかないことの起きる可能性があるのが、この治療法なのです」

GVH病(GVHDともいう)というのは、骨髄移植独特の症状で、臓器移植で起きる「拒絶反

「応」とは全く逆の現象である。つまり、患者の体内に入ったドナーの造血幹細胞が、患者自身を「異物」と判断して攻撃してしまう。皮膚や内臓が対象になることが多く、悪化すると確実に命にかかわる。

いつしか加藤助教授の説明は、悲観的な内容が多く占められるようになっていった。何しろ世界を見回しても、真由子さんと同じ病気では移植例がないのだ。タイプ2では日本国内に1例あったものの、結果的には移植の効果がなかった。加藤助教授が言葉を慎重に選びながら、明るい見通しを表明できないのも無理はなかった。

実は、加藤助教授は11月に和歌山県立医科大学に呼ばれて講演をした際、日赤和歌山の田中医師に会い、真由子さんの症状を詳しく聞かされていた。間に合うかどうか、そこが最大のポイントだったのだ。逆に、代謝異常の世界的権威であるアメリカ・ミネソタ大学の教授に連絡をとったところ、「理論的には効果が認められる可能性がある。ぜひ移植をすべきだ」という助言をもらった。

「この場では結論をお出しにならなくて結構です。移植を希望されるかどうかは、改めてご本人とご家族で話し合ってください。ひと晩考えて、迷いがなければご返事をお願いします」

加藤助教授は、その言葉ですべての説明を締めくくった。

「私、移植を受ける」

真由子さんは即座にそう言ったが、ひとまず持ち帰って家族みんなで相談することにした。だが、

真由子さん自身が移植を希望する以上、それをひっくり返す理由は何もなかった。ドナーは姉の仁美さんと決まっていた。仁美さんと政人さんのHLAは、真由子さんと2座違いという条件は同じでも、若いほうがやはり細胞の「生き」がいいからだ。

そうなる、移植時期は仁美さんが高校の春休みに入る3月あたりがいい。家族でそう決めてから、27日に加藤助教授に電話で伝えた。

こうして、真由子さんのCD34陽性細胞移植は最終的に決まったのである。

(hideさんとの対面が、真由子にとっては生涯最後の「楽しみ」となってしまうのかもしれない……)

加藤助教授の説明から推して考えると、そうなる可能性を両親は否定しきれなかった。

## ●思いがけない感激の連続

1995年の大晦日が近づいてきた。hideと対面する前後の詳細なスケジュールが決まった。30日から元日までの2泊3日で両親と真由子さん、仁美さんの4人が東京を訪れ、その間はメイク・ア・ウィッシュオブジャパン(MAWJ)のボランティアが付き添うことになった。

実は、東海大学病院からの帰途、一家は雪に阻まれていた。家族が旅行するときは政人さんが運転するワゴン車を利用するのだが、折からの降雪で大渋滞がつづいていた。30日にはまた東京へ出

てくるのだから、いつそ帰宅しなくてもよさそうなものだが、自宅には大切なものが置いてあった。hideに贈るマフラーが、完成していなかったのだ。これを仕上げてから上京しなければならぬ。

しかし、雪はなおつづき、渋滞は解消しそうもない。政人さんは思いきって知多半島へ向けてハドルを切った。そこから伊勢湾フェリーで海上を三重県鳥羽市まで出て、南紀を走れば雪もないだろうと予想したのだ。見事に的中した。それでも、帰宅するまでに24時間を要していた。

真由子さんはマフラーの仕上げに熱中した。対面が決まった10月から編み棒を操ってきたが、不自由な手ではそうはかどりはしない。2カ月以上かけてきた甲斐あって、和歌山を出る前日の29日ようやく完成した。

大晦日、コンサート会場となる東京ドームの周辺は、コスチュームプレイのファンたちで埋め尽くされた。様々な色に染め上げ、逆立てた髪の毛、歌舞伎の隈取りよろしく派手な化粧、看護婦の制服や動物の着ぐるみ……と、大人が初めて目にしたら、それこそ仰天するようないでたちの、大半が若い女性のファンたちだ。

しかし、ごく普通の普段着姿の若い女性が多いし、よく見ると中年の女性たちも混ざっている。しかも、コスチュームプレイのファンたちが、それなりに秩序だった動きを示しているのに気づかされる。

真由子さんも派手に決めた。赤い帽子に赤いセーター、黒のコートといういでたちで、さらに帽

子の下にのぞく髪の毛も赤かった。

コンサートは午後6時に始まった。家族4人は、あらかじめ真由子さんが確保しておいたスタンド席で演奏を見守った。真由子さんの体が自然に動く。それをテレビカメラが追いつづけた。

最後の2曲になったとき、事務所の配慮で最前列に案内された。

(こんなことしてもらって、いいのかな?)

両親のほうで戸惑ったが、真由子さんは素直に、体を揺らしつづけていた。

興奮のままにコンサートが終了し、いよいよ対面となる。4人とMAWJの大野さんらは控え室に案内された。

待つほどもなく、ステージ衣装のままのhideが姿をあらわした。

「きょうは、どうもありがとうございます」

政人さんと和子さんが声をそろえたが、hideの視線はまっすぐ真由子さんに向けられて、歩み寄っていった。

「どうだった?」

右手を差し出しながら、hideが真由子さんに問いかける。

「うれしかった」

笑顔いっぱい答えた真由子さんが、紙包みを差し出した。

「これ、自分でつくって」

「ほんと？　ありがとう。開けていい？」

hideの指がぎこちない。

「おっちゃん、ステージ終わったばかりで、指がブルブル震えてる」

もどかしげに包みを開けようとするhideに、和子さんが言葉を添える。

「一生懸命につくったんです」

それもそのはずだ。黒い毛糸のマフラーは、この日に備えて真由子さんが自分で手編みをしてきた。手にも障害が出ていて、うまく指づかいができないため、完成するまで2カ月もかかった。

ありがとう、と言いながら、hideはすぐ首に巻いた。見つめ合ったふたりの笑顔が交錯して、控え室を温かく包んだ。このマフラーはその後、hideの愛用品となった。旅行カバンがいっぱいになって、家族やスタッフがマフラーを外そうとしても、これだけは必ず荷物の中に入れた。

「真由ちゃん」

真由子さんの肩を軽くたたきながら、hideがケースからギターを取り出した。数本のサインペンから真由子さんが選んだ紫色で、ボディのところにサインを入れた。

お返しとなったこのギターはhideが特に指定したもので、日本ではたった1本、それも大阪の楽器店にしか置いてなかった。MAWJのポランティアがわざわざ東京まで運んできたのだ。

hideが弦の調子を整えて、ギターを爪弾き始めた。真由子さんの耳元に顔を近づけ、小さな声で歌い出した。『紅』だった。

（何も知らせてなかったけれど、これって、本当に偶然なんだろうか？　真由子がhideさんを好きになったきっかけの曲を、そのhideさんが、真由子のために歌ってくれている……）

あまりにも「できすぎ」の情景に、和子さんは声を失ったが、まぎれもない偶然のたまものだった。

「あれ、やりたかったのになあ。時間があまりないや」

そこには、ゲーム機のセガ・サターンが置いてあった。X JAPANをテーマにしたゲームソフトが売られていて、実は真由子さんも自宅で楽しんでいたので。ゲームは、東京ドームの内部をメンバーの楽屋目指して探し歩く内容となっているため、控え室に来る途中も家族みんな「あ、ここだ、ここ」などと、ゲームを思い出しながらはしゃいでいたものだった。

（時間がなくて、そろそろ終わりなんだろうな）

和子さんの心の内を読んだように、真由子さんが口を開く。

「2月から入院するけど、手紙を書くんで、お返事をください」

再び、和子さんが口を添える。

「病院に入ると、もう6カ月は出られないんです」

真由子さんの目をしっかりと見つめたhideが、きっぱり言い切った。

「OK。頑張ってるね、頑張ろうな。お兄ちゃんも書くからね」



そんなやりとりを聞いていても、実は両親はあまり期待していなかった。hideは手紙嫌いだと聞いていたし、たまたま会った患者に何もそこまでではしてくれないだろうという気持ちのほうが強かったのだ。

ただ、あれ？ ちょっと違うな、という雰囲気を感じたのは、色紙にサインを依頼したときだ。

「あのう、真由子が入院していた和歌山の病院に、大のhideさんファンがいるんです。その看護婦さんに頼まれたものですから……」

おずおずといった感じで差し出した色紙に、hideはすらすらとサインをしてくれたうえ、「真由子をよくしく」と添え書きしたのである。

（わあ！ 真由子の名前をちゃんと覚えてくれていたんだ）

たった一度だけ対面する難病の患者に会うのに、そうは漢字まで覚えてくれるものでもないはずだ、という思い込みが和子さんにはある。

（それなのに、問いかけるでもなく、きちんと正確に書いてくれた……）

和子さんは目頭が熱くなった。

こうした対面の一部始終を、テレビカメラのライトが追い、スチールカメラのフラッシュがとらえた。が、マスコミは15分ほどで引き揚げていった。

（これで、おしまいなんだろうな。私たちもホテルへ戻らなきゃ……）

マスコミがいなくなれば、一時の感動もさめていくのではないかとばかり、和子さんは思い込ん

でいた。超有名な芸能人が、たまたま難病の子に会ってくれはしたが、それも仕事の一環なのだろうと、対面が決まっただけで思いつづけてきたのだ。

（それでもいい、これから細胞移植を受ける真由子にとって、大きな励みになったことだけは間違いない）

しかし、和子さんの予測はうれしい誤算となっていく。

「じゃ、行こうか」

hideが真由子さんの手をとった。

行こうかって、どこへ？ 和子さんは一瞬、聞き間違えたと思った。真由子さんと手をしっかりとつないだhideが、ポツリと言う。

「これから、打ち上げがあるんだ」

歩行が不自由な真由子さんの歩みに合わせて、hideがゆつくり歩く。相変わらず、手はしっかりと握られている。

打ち上げ会場は立食パーティーにしつらえてあった。hideがすぐ折り畳み椅子を探し当て、真由子さんのために会場正面に置いた。部屋の隅にあるクローラーボックスからウーロン茶を取り出し、プルトップを開けてストローを差し込んでから、真由子さんに手渡した。

（椅子もウーロン茶も、こんな有名な人だから、マネジャーに命じてもなんの不思議もないのに……）

和子さんばかりか、政人さんも仁美さんも、目の前で次々と繰り広げられる光景を、信じられない思いで見つめていた。

ウーロン茶を飲み干したあと、真由子さんはストローとともに空き缶を、しっかりとバッグにしまひ込んだ。帰宅してからはずっと机の上に置いて、宝物にするためだ。

「ダチの真由子、よろしくな」

X JAPANのメンバーに、そう言って紹介してくれるhideの表情は生き生きしていた。真由子さんの表情も輝いていた。

MAWJへの希望で真つ先に挙げた「X JAPANのメンバー全員と……」は、ディズニールンドでという場所こそかなわなかったが、はからずも真由子さんの願いどおりに実現したわけだ。

打ち上げが終わり、控え室に戻るときも、hideは真由子さんの手をしっかりと握り、もう一方の手に持った懐中電灯で足下を照らした。歩みを真由子さんに合わせているから、ほかのメンバーやスタッフは先に消えていた。

ふと見ると、通路の途中にリーダーのYOSHIKIが立ち止まっていた。

「待ってただよ」

YOSHIKIも真由子さんの手を握ってくれ、3人が一列に並んで歩いた。

(hideに会いたいってことは、自分が無視されたことにつながるかもしれないのに、YOSHIKIも優しいんだなあ)

和子さんは、また目が潤んだ。

こんなことになるとは思っていなかったから、政人さんはhideに贈られたギターとセガ・サターンをずっと抱えていた。

(なんだ、また控え室に帰って来るんなら、ここに置いておけばよかった)

控え室でhideは、真由子さんにスタッフジャンパーを着せてくれた。これで、いよいよお別れとなる。スタッフ用の出口から出ようとした貴志さん一家はハッとした。ファンが大量に待ちかまえているのだ。

今でこそ、真由子さんの存在はhideファンに知られているが、そのころは「ただの女の子」にすぎない。スタッフジャンパーなど着ていれば、はぎとられる心配がある。

「早く、早く」

和子さんは真由子さんのジャンパーを脱がせ、政人さんはギターをコートに隠すのに忙しかった。このときの話になると、一家はいつも大笑いになる。

## ●テレビ放映の反響

1996年1月9日にテレビ朝日系列の「スーパーモーニング」で、hideとの対面を中心に真由子さんの闘病生活が紹介された。午前9時過ぎ、時間にして20分に満たなかったが、基本的な

内容がほぼ網羅されていたせいか、反響がすごかった。

数日してから、自宅へ手紙がどつきり届くようになったのだ。番組では住所などは紹介されなかったが、感動した視聴者がテレビ局やメイク・ア・ウィッシュなどに問い合わせた結果だった。

いち早く反応したひとりが、ブログで紹介した福岡県遠賀郡の折田和子さんである。中学1年の文化祭で『tears』を聴いてファンになってから、X JAPAN関係の番組は必ず録画している折田さんは、学校から帰ってから再生してすぐ思った。

「友達になりたい！」

テレビ局に頼み込んで住所を教えてもらった。4月生まれの折田さんは、翌年3月生まれの真由子さんをひとつ下の学年だと勘違いしていたが、すぐに返事がきて高校受験を控えた同学年とわかり、ますます応援したくなった。

2月に真由子さんが伊勢原の東海大学病院へ入院すると知り、それに間に合わせようと千羽鶴を折り始めた。ひとりではとても間に合わない。クラスの友達に呼びかけたら、10人ほど手伝ってくれることになった。

それでも中心となるのが自分であることは承知していた。高校受験が間近い時期、明け方近くになることもあったが、不思議とこのとき、母のます子さんは小言を言わなかった。1週間をかけて千羽鶴を折り終え、入院前の真由子さんの自宅へ送り届けた。その後、続々と自宅や病院に届く千羽鶴の、これが初めての飛来だったのだ。

以来ずっと文通がつづいている。初めて顔を合わせたのは97年大晦日のラストコンサートだった。ます子さんも同行して、東京ドームの中では娘たちと一緒に体を動かした。

「96年秋に福岡でコンサートがあったとき、娘には費用がいくらかかって帰りのスケジュールはどうしてってことを出させて行かせました。でも私の考えも変わってきました。子どもがこれだけのめり込むのはどこがいいからなのか、親も勉強しなくてはと思って曲を聴いたりしました」

折田さんは短大保育科に進学しようと考えている。保母の資格を取るためだ。真由子さんの闘病生活と無縁ではない。やはり、人の役に立つ仕事をしたいと、真由子さんに教えられた。むろん知り合う前から、人に接する仕事に就きたいとは考えていたが、看護婦は断念した。ボランティアにも力を入れないからだ。

「目が見えない人にも、耳が聞こえない人にも、X JAPANの曲を通じて音楽に親しんでほしいんです。そのボランティアをするには、看護婦さんは不規則すぎますから」

進学した県立高校の吹奏楽部で、クラリネットを吹いているが、吹奏楽の仲間たちとは、夏から秋にかけて骨髓バンクへの協力を呼びかける募金活動をするという。

「今までやりたいことがいっぱいあって、中学のころから募金活動をしようと思ってても行動に移せなかったんです。でも、待ってるだけじゃダメなんだって、積極的に行動することをhideちゃんに教えてもらったような気がします」

こうした事柄になると、言葉では言いあらわせないくらいの思いが重なってくるようだ。

「hideちゃんを知らないころだったら、一步引いてたところがある気がします。病気や障害を持つている人を自分たちとちよつと違うと見るような。でも、真由子と一緒に手をつないで、『これから頑張ろうな』って姿を見てたら、そういうことを気にせず思ったことを素直に言えるように教えてもらったと思います」

hideの葬儀に行くか行くまいかずいぶん迷った末に、東京行きをあきらめたのは、短大を指すには出席日数も影響してくるからだだった。

「それに、悪い夢を見ているようで、まだhideちゃんの死が信じられないくらいなんです。葬儀に行ったら、もう完璧に現実になってしまうような気もしましたから」

それだけに、連休が明けて学校へ行っても泣いてばかりいた。真由子さんへの手紙にも同じような思いをつづつて、逆に真由子さんに慰められるほどだった。

「真由子は、すごく強いというか、つらいことがあっても、後ろ向きじゃなくて、前向きな姿勢を教えてもらった気がします。自分がきついときでも『今度、Xがテレビに出るね』とか『あのときのテレビのhideはかわいかったね』とか、明るい話をいっぱいしてくれるので、私もぐちぐち考えるようなところがありましたけれど、変わってきたように思います。一生懸命に生きることとか、夢のために頑張ることとかを、真由子に教わったような気がします」

折田さんは、真由子さんが退院するときにも千羽鶴を折った。このときには高校の友人たちに手伝ってもらい、伊勢原のマンションに送った。